第2講　古文対策　その2

第3問

次の文章は、「車中雪」という題で創作された作品の一節である（『草縁集』所収）。主人公が従者とともに桂（京都市西京区の地名）にある別邸（本文では「院」）に向かう場面から始まる。これを読んで、後の問い（**問1**～**4**）に答えよ。なお、設問の都合で本文の上に行数を付してある。（配点　50）

桂の院つくりそへ給ふものから、(ア)あからさまにも渡り給はざりしを、友待つ雪(注1)にもよほされてなむ、ゆくりなく思し(注2)立たすめる。かうやうの御歩きには、源少将、藤式部をはじめて、今の世の有職と聞こゆる若人のかぎり、必ずしも召しまつはしたりしを、(イ)とみのことなりければ、かくとだにもほのめかし給はず、「ただ親しき家司(注3)四人五人して」とぞ思しおきて給ふ。

やがて御車引き出でたるに、「空より花の(注4)」と a うち興じたりしも、めでゆくまにまにいつしかと散りうせぬるは、かくてやみぬとにやあらむ。「さるはいみじき出で消えにこそ」と、人々死に返り(注5)妬がるを、「げにあへなく口惜し」と思せど、「さて b 引き返さむも

メモ欄

人目悪(わろ)かめり。なほ法輪(注6)の八講にことよせて」と思しなりて、ひたやりに急がせ給ふほど、またもつつ闇(注7)に曇りみちて、ありしよりけに散り乱れたれば、道のほとりに御車たてさせつつ見給ふに、何がしの山、くれがしの河原も、ただ時の間に c 面変(おも)はりせり。

かのしぶしぶなりし人々も、いといたう笑み曲げて、「これや小倉(をぐら)(注8)の峰ならまし」「それこそ梅津(注9)の渡りならめ」と、口々に定めあへるものから、松と竹とのけぢめをだに、とりはづしては違(たが)へぬべかめり。「あはれ、世に面白しとはかかるをや言ふならむかし。なほここ(注10)にてを見栄(は)やさまし」とて、やがて下簾(したすだれ)(注11)かかげ給ひつつ、

ここもまた月の中なる里ならし雪の光もよに似ざりけり

など d 興ぜさせ給ふほど、(ウ)かたちをかしげなる童(わらは)の水干(すいかん)着たるが、手を吹く吹く御あと尋(と)め来て、榻(しぢ)(注12)のもとにうずくまりつつ、「これ御車に」とて差し出でたるは、源少将よりの御消息なりけり。e 大夫(たいふ)とりつたへて奉るを見給ふに、「いつも後(おく)らかし給はぬを、かく、

X 白雪のふり捨てられしあたりには恨みのみこそ千重に積もれれ」

メモ欄

とあるを、ほほ笑み給ひて、畳紙（たたうがみ）に、

Y　尋め来やとゆきにしあとをつけつつも待つとは人の知らずやありけむ

やがてそこなる松を雪ながら折らせ給ひて、その枝に結びつけてぞたまはせたる。

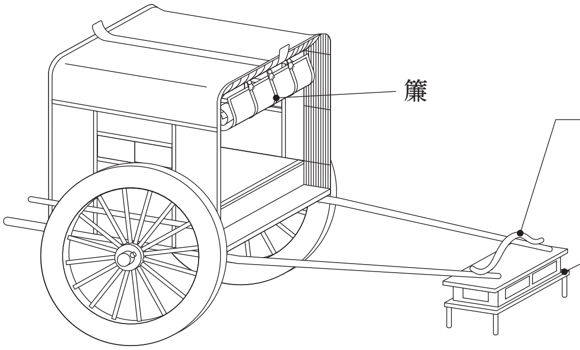
やうやう暮れかかるほど、さばかり天霧（あまぎ）（注13）らひたりしも、いつしかなごりなく晴れわたりて、名に負ふ里の月影はなやかに差し出でたるに、雪の光もいとどしく映えまさりつつ、天地（あめつち）のかぎり、白銀（しろかね）うちのべたらむがごとくきらめきわたりて、あやにまばゆき夜のさまなり。

院（注14）の預かりも出で来て、「かう渡らせ給ふとも知らざりつれば、とくも迎へ奉らざりしこと」など言ひつつ、頭（かしら）もももたげで、よろづに追従するあまりに、牛の額の雪かきはらふとては、軛（くびき）に触れて烏帽子（えぼし）を落とし、御車やるべき道清むとては、あたら雪をも踏みしだきつつ、足手の色を海老（えび）（注15）になして、桂風（かつらかぜ）を引き歩く。人々、「いまはとく引き入れてむ。かしこのさまもいとゆかしきを」とて、もろそそき（注16）にそそきあへるを、「げにも」とは思すものから、ここもなほ見過ぐしがたうて。

メモ欄

（注）

1　友待つ雪――後から降ってくる雪を待つかのように消え残っている雪。
2　思し立たす――「す」はここでは尊敬の助動詞。
3　家司――邸（やしき）の事務を担当する者。後出の「大夫」はその一人。
4　空より花の――『古今和歌集』の「冬ながら空より花の散りくるは雲のあなたは春にやあるらむ」という和歌をふまえた表現。
5　死に返り――とても強く。
6　法輪の八講――「法輪」は京都市西京区にある法輪寺。「八講」は『法華経（ほけきょう）』全八巻を講義して讃（たた）える法会。
7　つつ闇――まっくら闇。
8　小倉の峰――京都市右京区にある小倉山。
9　梅津の渡り――京都市右京区の名所。桂川左岸に位置する。
10　ここにてを見栄やさまし――ここで見て賞美しよう。
11　下簾――牛車（ぎっしゃ）の前後の簾（下図参照）の内にかける帳（とばり）。
12　榻――牛車から牛をとり放したとき、「軛」を支える台（下図参照）。牛車に乗り降りする際に踏み台ともする。
13　天霧らひ――「天霧らふ」は雲や霧などがかかって空が一面に雲るという意。
14　院の預かり――桂の院の管理を任された人。
15　海老になして――海老のように赤くして。
16　もろそそき――「もろ」は一斉に、「そそく」はそわそわするという意。



牛車図

メモ欄

問１　傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 23 ～ 25 。

(ア)　あからさまにも　23
① 昼のうちも
② 一人でも
③ 少しの間も
④ 完成してからも
⑤ 紅葉の季節にも

(イ)　とみのこと　24
① 今までになかったこと
② にわかに思いついたこと
③ ひそかに楽しみたいこと
④ 天候に左右されること
⑤ とてもぜいたくなこと

(ウ)　かたちをかしげなる　25
① 格好が場違いな
② 機転がよく利く
③ 和歌が上手な
④ 体を斜めに傾けた
⑤ 見た目が好ましい

メモ欄

問２　波線部ａ～ｅについて、語句と表現に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 26 。

① ａ「うち興じたりしも」の「し」は強意の副助詞で、雪が降ることに対する主人公の喜びの大きさを表している。

② ｂ「引き返さむも」の「む」は仮定・婉曲の助動詞で、引き返した場合の状況を主人公が考えていることを表している。

③ ｃ「面変はりせり」の「せり」は「り」が完了の助動詞で、人々の顔色が寒さで変化してしまったことを表している。

④ ｄ「興ぜさせ給ふ」の「させ」は使役の助動詞で、主人公が和歌を詠んで人々を楽しませたことを表している。

⑤ ｅ「大夫とりつたへて奉るを見給ふ」の「給ふ」は尊敬の補助動詞で、作者から大夫に対する敬意を表している。

メモ欄

問３　和歌Ｘ・Ｙに関する説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は［27］。

①　源少将は主人公の誘いを断ったことを気に病み、「白雪」が降り積もるように私への「恨み」が積もっているのでしょうね、という意味の和歌Ｘを贈った。

②　源少将は和歌Ｘに「捨てられ」「恨み」という恋の歌によく使われる言葉を用いて主人公への恋情を訴えたため、主人公は意外な告白に思わず頬を緩めた。

③　主人公は和歌Ｙに「待つ」という言葉を用いたのに合わせて、「待つ」の掛詞(かけことば)としてよく使われる「松」の枝とともに、源少将が待つ桂の院に返事を届けさせた。

④　主人公は「ゆき」に「雪」と「行き」の意を掛けて、「雪に車の跡をつけながら進み、あなたを待っていたのですよ」という和歌Ｙを詠んで源少将に贈った。

メモ欄

問4　次に示すのは、「桂（かつら）」という言葉に注目して本文を解説した文章である。これを読んで、後の(i)～(iii)の問いに答えよ。

本文は江戸時代に書かれた作品だが、「桂」やそれに関連する表現に注目すると、平安時代に成立した『源氏物語』や、中国の故事がふまえられていることがわかる。以下、順を追って解説していく。

まず、1行目に「桂の院」とある。「桂」は都の中心地からやや離れたところにある土地の名前で、『源氏物語』の主人公である光源氏も「桂の院」という別邸を持っている。「桂の院」という言葉がはじめに出てくることで、読者は『源氏物語』の世界を思い浮かべながら本文を読んでいくことになる。

次に、16行目の和歌に「月の中なる里」とある。実はこれも「桂」に関わる表現である。古語辞典の「桂」の項目には、「中国の伝説で、月に生えているという木。また、月のこと」という説明がある。すなわち、「月の中なる里」とは「桂の里」を指す。したがって、16行目の和歌は、「まだ桂の里に着いていないはずだが、この場所もまた『月の中なる里』だと思われる。なぜなら、［Ⅰ］」と解釈できる。

「桂」が「月」を連想させる言葉だとすると、26行目で桂の里が「名に負ふ里」と表現されている意味も理解できる。すなわち、25～28行目は［Ⅱ］、という情景を描いているわけである。

最後に、32行目に「桂風を引き歩く」とある。「桂風」は「桂の木の間を吹き抜ける風」のことであるが、「桂風を引き」には「風邪を引く」という意味も掛けら

メモ欄

れている。実は『源氏物語』にも「浜風を引き歩く」という似た表現がある。光源氏の弾く琴の音が素晴らしく、それを聞いた人々が思わず浜を浮かれ歩き風邪を引くというユーモラスな場面である。『源氏物語』を意識して読むと、29～34行目では主人公がどのように描かれているかがよくわかる。すなわち、［Ⅲ］。

以上のように、本文は「桂の院」に向かう主人公たちの様子を、移り変わる雪と月の情景とともに描き、最後は院の預かりや人々と対比的に主人公を描いて終わる。作者は『源氏物語』や中国の故事をふまえつつ、「桂」という言葉が有するイメージをいかして、この作品を著したのである。

(i)　空欄［Ⅰ］に入る文章として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は［28］。

① 小倉や梅津とは比較できないくらい月と雪が美しいから
② 雪がこの世のものとは思えないほど光り輝いているから
③ ひどく降る白い雪によって周囲の見分けがつかないから
④ 月の光に照らされた雪のおかげで昼のように明るいから

メモ欄

(ii) 空欄 Ⅱ に入る文章として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 29 。

① 空を覆っていた雲にわずかな隙間が生じ、月を想起させる名を持つ桂の里には、一筋の月の光が鮮やかに差し込んできて、明るく照らし出された雪の山が、目がくらむほど輝いている

② 空を覆っていた雲がいつの間にかなくなり、月を想起させる名を持つ桂の里にふさわしく、月の光が鮮やかに差し込み、雪明かりもますます引き立ち、あたり一面が銀色に輝いている

③ 空を覆っていた雲が少しずつ薄らぎ、月を想起させる名を持つ桂の里に、月の光が鮮やかに差し込んでいるものの、今夜降り積もった雪が、その月の光を打ち消して明るく輝いている

④ 空を覆っていた雲は跡形もなく消え去り、月を想起させる名を持つ桂の里だけに、月の光が鮮やかに差し込んできて、空にちりばめられた銀河の星が、見渡す限りまぶしく輝いている

メモ欄

(iii) 空欄 Ⅲ に入る文章として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 30 。

① 「足手の色」を気にして仕事が手につかない院の預かりや、邸の中に入って休息をとろうとする人々とは異なり、「ここもなほ見過ぐしがたうて」とその場に居続けようとするところに、主人公の律儀な性格が表現されている

② 風邪を引いた院の預かりを放っておいて「かしこのさまもいとゆかしきを」と邸に移ろうとする人々とは異なり、『げにも』とは思す」ものの、院の預かりの体調を気遣うところに、主人公の温厚な人柄が表現されている

③ 軽率にふるまって「あたら雪をも踏みしだきつつ」主人を迎えようとする院の預かりや、すぐに先を急ごうとする人々とは異なり、「ここもなほ見過ぐしがたうて」と思っているところに、主人公の風雅な心が表現されている

④ 「とくも迎へ奉らざりしこと」と言い訳しながら慌てる院の預かりや、都に帰りたくて落ち着かない人々とは異なり、「『げにも』とは思す」ものの、周囲の人を気にかけないところに、主人公の悠々とした姿が表現されている

「大学入学共通テスト」２０２４年度本試験より（一部改変）

メモ欄

■2024年度 本試験

問題番号（配点）	設　問	解答番号	正　解	配　点
第3問（50）	1	23	3	5
		24	2	5
		25	5	5
	2	26	2	7
	3	27	4	7
	4	28	2	7
		29	2	7
		30	3	7

■現代語訳

（主人公が）桂（かつら）の別邸を増設なさったが、少しの間も出かけなさらなかったところ、後から降ってくる雪を待つかのように消え残っている雪にうながされて、突然（別邸に行くことを）思い立ちなさったようだ。このようなお出かけには、源少将や、藤式部をはじめとして、今の世の識者と評判の若者の皆を、必ずお呼びになりそばに付き添わせたが、にわかに思いついたことであったので、こうとさえそれとなく言いなさらず、「ただ親しい邸（やしき）の事務を担当する者を四、五人とともに（行こう）」と考えなさる。

すぐに御牛車を引き出したところ、「空より花の」と（『古今和歌集』の「冬なのに空から花が散ってくるのは、雲の向こうは春なのであろうか」という和歌をふまえて）おもしろがったが、賞美していくにつれて早くも（雪が）散って消えたのは、こうして止（や）んでしまうということであろうか。「それにしてもひどく見劣りがすることだ」と、人々がとても強く悔しがると、「本当に期待外れで残念だ」と（主人公は）お思いになるが、「それで引き返すようなことも人から見てよくないようだ。やはり法輪寺の法会を口実に（出かけよう）」とお思いになって、ひたすら急がせなさるうちに、再びまっくら闇に一面に曇って、先ほどよりももっと（雪が）散り乱れたので、道の脇に御牛車（ぎっしゃ）をたて［＝停め］させながら（主人公が）見なさると、何とかという山や、何とかという河原も、ただ少しの間に（雪で）様子が違ってしまった。

あの（雪が止みかけたので来るのに）渋々だった人々も、たいそうとても笑顔で顔をほころばせて、「これが小倉山の峰であったら」「それが梅津の渡り（のよう）であるのだろう」と、口々に言い合っているけれど、松と竹との区別をさえ、うっかり誤って間違ってしまうにちがいないようだ。（主人公が）「ああ、とてもおもしろいとはこのようなことを言うのであるようだね。やはりここで見て賛美しよう」と言って、そのまま牛車の簾（すだれ）の内にかける帳（とばり）をかかげなさりながら、

この場所もまた月の中にある里であるらしい。雪の光もこの世のものとは似ていないことよ。

などとおもしろがりなさるうちに、見た目が好ましい水干（すいかん）を着ている召使いの子どもが、手をふうふう吹き（牛車の）御跡を尋ね追って来て、軛（くびき）を支えたり、牛車に乗り降りする際に踏み台ともする台のもとにうずくまりながら、「これを御牛車（に乗ってらっしゃる人）に

（お渡しください）」と言って差し出したのは、源少将からのお手紙であったよ。大夫［＝邸の事務を担当する者］が取り次いで差し上げたのを（主人公が）見なさると、（源少将からの手紙には）「いつも置いてきぼりになさらないのに、このように（今日は置いてきぼりになさるとは）、

白雪が降り、振り捨てられたあたり［＝置いてきぼりにされた私］には、恨みのみが幾重にも積もっているよ」

とあるので、（主人公は）微笑（ほほえ）みなさって、畳紙（たとうがみ）に（返歌を書いた）、

尋ね追って来るかと雪に（牛車で）行った跡をつけながら待っているとは、あなたは知らなかったのであろうか

すぐにそこにある松を雪がついたまま折りなさって、その枝に結びつけて（使者に）お与えになった。

次第に日が暮れかかるうちに、あれほど雲や霧などがかかって空が一面に曇ったのも、はやくも跡形もなく一面に晴れて、月を想起させる名を持つ桂の里の月の光が鮮やかに差し込んで来たので、雪の光もますます映えまさっては、天地の果てまで、白銀（しろかね）を叩（たた）いて伸ばしたようにー面にきらめいて、言いようもなくまぶしいくらい美しい夜の様子である。

桂の院の管理を任された人も出てきて、「このようにいらっしゃるとも存じ上げなかったので、すぐにもお迎え申し上げなかったこと」などと言いながら、頭も上げないで、むやみに付き従うあまりに、牛の頭の雪を払おうとしては、軛に触れて烏帽子（えぼし）を落とし、御牛車が進むだろう道を掃除しようとしては、もったいない［＝せっかくの］雪を踏み荒らしながら、足や手の色を海老（えび）のように赤くして、桂の里の風に吹かれ、風邪を引きながら歩き回る。人々が、「さあ早く（牛車を）引き入れよう。あそこ［＝桂の院］の様子もとても見たいので」と言って、一斉にそわそわし合っていると、（主人公は）「本当に」とはお思いになるが、ここもやはり見過ごしにくくて（まだここにいたいと、その場から進めなく思っていた）。